

ルブック アグン  
**LUBUK AGUNG 村 調査報告書**

2004年12月8日

報告者 坂 井 美 穂

東京地方裁判所 御中

## 第1 調査の概要

2004年9月21日、坂井美穂において Lubuk Agung 村（ルブック・アグン）を訪れ、視察調査を行った。調査方法としては、まず Lubuk Agung 村原告住民宅で、村落全体の状況を把握するために、住民数名から移転状況などに関する聞き取りを行い、続いて実際に住民同行の下で現地視察を行った。

## 第2 調査結果

以下、視察結果とその後の聞き取り結果に分けて、調査結果を示す。

### 1 現地調査結果

まず、現地の被害状況を把握するため、Zukirman 氏（ズキルマン、男性、原告番号D）の同行の下、現地の視察を行った。結果は以下の通りである。

#### （1）家屋、井戸、MCK

まず住民の現在の生活状況を把握するため、新しい村の家屋を視察した。



（写真1）

これは、Lubuk Agung 集落内の家屋である（写真1）。政府から用意された家屋が余りにも粗末であることに憤りを感じた住民は、自身の可能な範囲で、そ

の家屋の増改築を行った。その際、使用される材料のほとんどが、昔の村から調達してきた木材やらトタン等である。この家屋は、高床式に改築されている。残念ながらこの家の住人は出稼ぎのためここには住んでおらず、話を聞くことが出来なかったが、近所の住人に聞いたところによると、ひどいときには、手で示しているその高さまで、浸水したことがあるという。



(写真2)



(写真3)

高床式の家屋の奥に、政府から支給されたという井戸があった(写真2)。移転当初からほとんど使われていなかったという井戸をのぞいて見た(写真3)。つるべも何も用意されていなかったの、においは分からなかったが、その水質の悪さは一目見ただけでも十分に分かるほどであった。



(写真4)

その井戸の隣に、意図的に掘られたような大きな穴の跡があった(写真4)。その大きさは、大体3メートル×4メートルほど、深さは2メートル足らずのものであった。話を聞くと、これは住民が自力で作った養殖池の跡とのことである。しかしながら、現実には、隣の井戸と同じ水源で魚が育つはずも無く、現在は見

る影もない状態である。



(写真5)



(写真6)

2001年頃には、政府から上水道設備のプロジェクトとして、タンクが建てられた(写真5)。しかし、このタンクは現在使用されておらず、タンクの蛇口はなくなってしまっている(写真6)。住民によれば、このタンクによって住民が利益を受けた、ということはないとのことである。また、このような設備は、後述するように、一旦 Lubuk Agung に移転した住民がさらに移転した Kualan Jaya 集落では見受けられなかった。



(写真7)



(写真8)

このように政府から水供給設備が造られなかったため、住民らは自身で購入した雨水をためるタンク(写真7)に、雨水を溜めておいたり(写真8) また、井戸に溜まった雨水、村落内の小さな川などを利用して水を確保しているとのこと

とである。

## (2) ゴム園



(写真9)

次に、アスファルト整備されていない村道から、村への重要なアクセス手段となる1本の公道へと抜け(写真9) Kuala Jaya 集落の方へ進んでいくと、そこにこの Lubuk Agung 村住民のゴム園が広がっている。



(写真10)



(写真11)

政府から用意されたゴム園一帯(写真10)を見渡すと、ゴムの木は見当たらず、ゴム以外の種類の木が多く茂っている。一方、公道沿いには、か細いゴムの木が植わっている(写真11)。しかし、収穫可能になるには、あと3~4年かかるとのことである。中には、せっかく植えられていても、土壌が十分ではないせいか、枯れてしまったりする木もあるという。

政府がゴムの木を植えた形を作るため、目に付きやすい公道沿いにはだけは植樹したと住民たちは理解している。

## 2 聞き取り結果

現地視察後、Abd Gani Jas 氏（アブドゥル・ガニ・ジャス、男性、原告番号 D 3 1 3）および同氏妻の Lia 氏（リア、女性、原告番号 D 1 2 8）に、Lubuk Agung 村内同氏自宅にて聞き取りを行った。また、その後、Lubuk Agung 村住民一部がさらに移転した Kualan Jaya（クアラン・ジャヤ）地区にて、Sohi 氏（ソヒ、男性、原告番号 D 4 9）、Abu Wazir 氏（アブ・ワジル、男性、原告番号 D 1 1 6）および現村長の Nurhamidi 氏（ヌルハミディ、男性、原告番号 D 3）に聞き取りを行った。以下、2つの聞き取りの結果をまとめたものである。

### （１）昔の村の状況

以前の村では、住民は水牛を飼育していた。水田、農園などを所有し、そこから生計をたてていた。余りが出ればそれを売ることも出来た。支出と収入を比べてつりあっていた。村の近くに流れる川から魚を捕ることもでき、幸せだった。水に困ることはかつては無かった。

### （２）移転過程について

1980年代中ごろ、県知事の第1アシスタントが村にやってきて、ダムが建てられ、住民は移転しなければいけないという話が出た。その際、リアウ州のティガプラス・コト・カンパル県の村々の慣習法指導者が集められた。移転に際しては、家屋は住居に適したものの、ゴム園はすでに収穫可能な状況なものが用意される、というのが政府側の約束だった。

その後、測量チームが1990年代初期にやってきて、住民の財産を測量していった。その際、測量に参加した住民もいたし、参加しなかった住民もいた。それから間もなくして、補償金が住民に支払われたが、Lubuk Agung の住民の中には、ほとんど補償金が支払われる過程について知っているものはいなかった。その後、94年に Lubuk Agung 村へ移転したが、生活が困難なため、その一部がさらに、隣の集落の Kualan Jaya へと移転せざるをえなかった。

### （３）新しい村について

今では、飲み水すら手に入れることが難しい。雨季は雨水を溜めて使用しているが、乾季は本当に水の入手が困難である。政府から用意された井戸はまったく機能していない。深さが足りないため、水が出ないからである。時々水を購入することもある。水浴しようにも、なかなか簡単に水場がない。用意された家屋など、人が住めるものではなかった。屋根はアスベストだった。

用意されたゴム園も、収穫できるものは何も無く、ようやく植えられた作物も野生動物の被害に遭うことが度々ある。今は水没を免れた昔のゴム園を耕したり、自分で切り開いた農園を耕して何とか食べている状況である。2001年には政府による上水道設備のプロジェクトがあり、村にはタンクが設置されたが、その水源がわからないばかりか、上水道としてまったく機能せず、やはり水は手に入

れられなかった。

自分の子供たちは、経済が困難なことからまともに教育を受けさせることができなかった。移転したことによって、家族もばらばらになってしまうことがある。

#### (4) 将来の展望

昔と比べて今の生活の方が不足しているものが多い。昔の村の方が生活が良かった。今では、生計手段が無いため、リアウ州州都プカンバル、同州バタム島やマレーシア、シンガポールにまで出稼ぎする住民が多い。恐らく、村の住民の半分は出稼ぎに行っているような状況である。また、男性だけでなく、女性も出稼ぎに出ざるをえない。

ダム建設の結果、住民は明らかに苦しめられ、現在も苦しんでいる。日本側からも、われわれ住民の困難な状況に対する支援がなされるべきである。ダム建設により私たちにもたらされた悲劇に早くピリオドを打って欲しい。

以上